小体研

Physical education

2020 年(令和2年)
11 月9日(月)
◇第3号◇
八重山地区小学校体育研究会
広報誌

八重山地区小学校体育研究会の発足にあたり、尽力された諸先生方のこれまでの活動等をアーカイブとして残していくために、文章を寄せて頂きました。その第１回目は吉濱剛先生です。

小体研寄稿①（全４回）

私と体育授業

八重山地区小学校体育研究会　相談役　吉　濱　剛

新型コロナウィルス感染の広がりの影響を受けて、世界中が非常事態に見舞われている今日、各種行事イベント等の中止が相次ぎオンライン開催を余儀なくされている現状です。

学体研等も開催が中止になり、日頃の実践発表の場がないのは非常に残念ではありますが、八重山地区小体研の活動が営々と続けられていることに心から敬意を表します。

今般ホームページを開設するにあたって原稿依頼があり、現会員の皆様にアーカイブのような活動の経緯の一端をお伝えしていきたいと思います。

私自身の小体研活動のスタートは中頭地区で、「楽しい体育」の草創期であったと思います。1980 年代に地区の小、中、高校の体育教師が一堂に会して合宿し、筑波大学の佐伯先生により「楽しい体育」理論が紹介されました。

講師は冒頭、「釣った魚を食べるには釣り人がいなければ食べられないが、釣り方が分かれば食べたいときに釣ることができる。」という学び方学習理論と、体育教師の現状について「体育教師は他の教科の先生からなんと言われているか知っていますか。『明朗活発教養なし』と、体育教師の研究・研修による授業改善の必要性を説かれていました。

当時は一斉授業中心が当たり前でしたので、「めあて学習」の授業は新しい学習理論として理論を学んでも授業は一斉授業のスタイルでした。

私は、新しい学習理論に傾倒して地区内のブロック別研究会（当時は毎月１回）があり、今できる技を組み立ててめあてを決め、試行錯誤しながら連続マット運動で行ったのが初の研究授業でした。

研究授業から何ヶ月か経ったある日、子どもから「先生、あんな授業やろう。あんな授業だったら楽しいから。」と声かけられ、「あんな授業ってどんな授業のことなの？」と問い返しました。「先生がたくさん来ていた授業があったでしょ。」この子は何を言いたいのか話をしながら考えました。

「一人一人がめあてに向かって学習を進める授業」がとても印象深く残っていたのでしょう。主体的に関われる授業を子どもたちは求めているんだと気づかされた瞬間でした。その後の体育学習の実践研究を貫くことに繋がりました。

その後、できるだけ研究授業を率先して行うようにしていました。

あのときの子どもが教えてくれた「あんな授業は子どもへのプレゼント」と位置づけ、自己の成長と子どもの笑顔や真剣なまなざしを見るために。

その後、八重山地区西表小学校に赴任したのは、２７歳の青年教師でした。